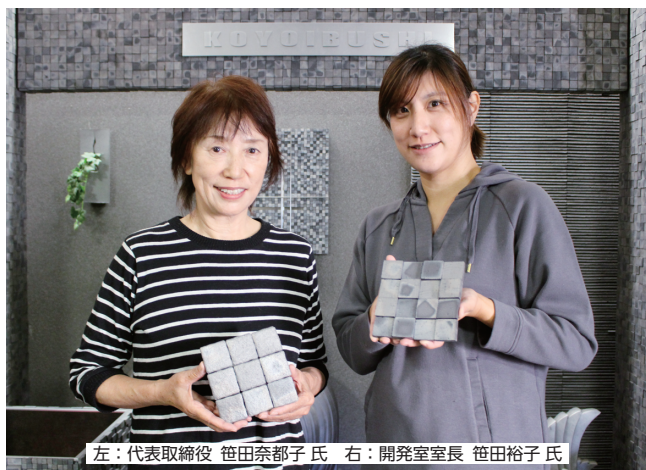


経営指導員が発見! キラ★星 企業

No.65

姫路商工会議所には様々な業種や規模の事業所が加入されています。

そのなかで、当所経営指導員が出会った「キラッ」と光る事業所の取り組みをご紹介します!



左：代表取締役 笹田奈都子氏 右：開発室室長 笹田裕子氏



鯉瓦



現在までの歩み

1805年、瓦の材料となる良質な粘土が採取できたことから姫路城主の命を受け、船津町にいぶし瓦の窯元が開かれた。この船津町に、1923年光洋製瓦を創立、1986年光洋製瓦株式会社を設立した。

科学的なデータに基づいた良質な粘土を職人の手作業と長年の経験により、光洋窯で1,200度近い温度で焼き上げた後、不完全燃焼の状態で焼いた「いぶし瓦」は、耐寒性や耐久性に優れた耐寒硬質であり、そのいぶし銀に輝く美しさは全国でも類を見ないほどの逸品と評価される。今日までに、姫路城大天守の鯉瓦、鬼瓦をはじめ、多くの神社仏閣等の重要文化財に使用され、伝統建築を後世へ継承している。

伝統技術をいかしたインテリア素材「KOYO IBUSHI」の開発と独自ブランドの確立

2001年に奈都子氏が4代目社長に就任。当時、いぶし瓦業界では、住宅建材の変化から屋根瓦の需要が減り、ピーク時3,000社以上あった事業所が、全国で約70社以下まで減少。同社も新たな収益の柱を模索せざるを得ない状況であった。一般的に、粘土瓦製造において、同じように製造しているつもりでも、品質にばらつきが生じ、色合いや形状が異なることが発生していた。この状況のなか奈都子氏は、これらの違いが、瓦の基礎となる粘土にも原因があるのではないかと考え、兵庫県立工業技術センターの担当者に相談。検討の結果、粘土の配合と焼成の仕方により、この違いが生じることを科学的に突き止め、数種類の粘土の配合比による違いを検討し、5年の歳月を経て、独自の製造方法を生み出したのである。「粘土や焼成を変えるということは瓦屋としては命取り。葛藤もあったが、今となっては、高品質で、耐寒硬質のいぶし瓦を製造することができた。」と自負する。高品質な屋根瓦を製造する傍ら、新たな収益の柱

光洋製瓦株式会社

代表取締役 笹田奈都子
開発室室長 笹田裕子

文化庁が認める「いぶし瓦」
国内外で高い評価 インテリア素材「KOYO IBUSHI」
伝統瓦の製造技術により世界で一つの商品を開発

として着目したのは、内外装用の壁材である。ここでは、いぶし瓦の特徴のばらつきを逆手にとり、正方形や長方形のブロックに成形してモザイクタイルのように敷き詰める壁材を開発。凸凹のパーツを並べたり、焼き色の違いを生かして陰影を生み出したりと多彩な商品化にも成功した。2007年に欧米の展示会に初出展を機に、数多くの展示会に出展し、伝統素材の持つストーリーと奥深さ、和モダンな素材感、微妙に異なる色合いが生む面白さがデザイナーや建築家の目に留まり、「ニューマテリアル」、「オンリーワン」といった高い評価を得た。現在では、国内外の有名ブランドメーカーや商業施設、高級ホテル等の内外装に採用され、インテリア素材「KOYO IBUSHI」が同社売上の5割ほどを占める主要事業として、独自ブランドを確立している。

今後の展望

2019年、次世代の経営者となる開発担当の裕子氏とともに新商品を開発。発砲セラミックという特殊な素材を使用することで軽量化を実現し、いぶし瓦の風合いを残しつつ、水に浮揚するインテリア素材「MOMO」を商品化。「MOMO」の商品名は、時代の変化や同社が2023年に100周年を迎えることから「百」という意味合いも込められる。奈都子氏は、「これまで展示会への出展が最優先だったが、新型コロナの影響により展示会が軒並み中止となり、MOMOのPRもできていない。まさに時代の変化。今後は、バーチャル商談ルームを構築して、リモートで展示、商談をおこない、KOYO IBUSHIのコンセプトを全世界へ発信していきたい。」と語った。

DATA

事業内容：いぶし瓦、いぶしインテリア素材製造、販売、屋根工事、体験観光

所在地：〒679-2101 姫路市船津町5241-5
電話：079-232-5295 FAX：079-232-7003

URL：http://www.koyoseiga.co.jp/